The Confidential Agent について

——二人のキホーテ——

植　木　利　彦

岡山理科大学理学部

(1994年9月30日　受理)

I

1938年，ヨーロッパではファシズムの台頭とミュンヘン条約の影響を受け，未来に対する不安が高まっていた。イギリスにおいても共有地にせっせと塹壕が掘られ，子供たちの疎開まで行われ，非常時予備軍まで編成される状態であった。グリーン自身もいつなんどき軍に徴用され，収入の道を断たれた残された家族がどのような生活を送ることになるのか不安な毎日であった。そこで彼は，当時，四苦八苦しながら執筆していた *The Power and the Glory* を午後に書くことにして，午前中はベンゼドリンの助けを借りて，六週間という驚異的な速さで，彼が徴用されたときに家族の経済的助けとなる娯楽物(Entertainment)である *The Confidential Agent* を執筆した。

この本は彼の娯楽物の持つ追う者と追われる者という特徴だけではなく，ＬとＤという匿名の密使を登場させることによって，グリーンは当時のヨーロッパにおけるある国の社会的，政治的，経済的不安が引き起こした問題を普遍的な問題にしている。そのような不安定な社会の中にあって，過酷な生活に苦しむ国民を救うためにひたすら人間の善性を信じ，誠実に生きるＤの姿は，グリーンがいう騎士道的な精神に満ち溢れたものといえる。この小論ではＤのそうした特徴に視点を向けてＤの誠実さの本質を明らかにしたい。

II

Ｄは戦争以前は大学のロマンス語の講師であり，『ロランの歌』(*The Song of Roland*)のベルヌ写本 (the Berne MS) の発見者であるのみならず，『ロランの歌』の研究者としてもなかなかの大家である。日常の生活や仕事が人間の性格形成に大きな影響力を持つことは大いに考えられることである。俗世間との関わりの少ないＤの学研的な生活，妻との幸せな毎日がそのまま続いていたら，彼は俗にいう「学者馬鹿」といわれながらも，幸せな世間知らずの人間のまま一生を終えていたかも知れない。彼が研究している『ロランの歌』の中ではロランの恋人アルダ (Alda) は，ロランの死の知らせを受けただけで，倒れて死んでしまった。伝説では愛する人を亡くすと，人は生きてはいけないことになっている。世間知らずのＤと彼の妻は正にこの物語の世界をそのまま信じ，革命以前，求愛時代

をロンドンで過ごしていた頃，一人前の大人なら歯が浮きそうで恥ずかしくていえそうにもないが，「お互い相手を亡くしたら，一週間とは生きておれない」，[1] などといい合っていたらしい。Dは伝説の世界で語られるように妻に対して誠実であろうとし，妻以外の女性を愛することなどできない人間であると自分にいい聞かせていたのであろう。彼の『ロランの歌』的な考えによれば，愛する人を無くした者は生きた屍ということになる。彼等は『ロランの歌』の影響を受け，現実の世界とは遊離した彼等だけの世界に生きていたのであり，そういうことが可能な時代であった。例えていうならば，外の世界では風雪が荒れ狂い，厳しい寒さが万物に襲いかかっていようとも，彼等は現実を目隠ししてくれる学問という厚い壁に囲まれ，経済的余裕という暖房のよく効いた家の中でぬくぬくと生活し，外の世界に無関心であった。

> D's earlier life and character were clearly built on trust; the search for the truth in his scholarly work and his passionate faithfulness to his wife, even after her death. Like Plato's perfectly just man, D is drawn into deceit for the best of reasons. . . . [2]

こういう環境にDを配置したのは，それとは逆の環境にDが置かれたときの読者に与える心理的効果の大きさをグリーンが計算していたからであろう。

世間知らずのDに現実の世界を見せつけたのが二年前から始まった内戦での過酷な体験であった。戦争中，彼が営倉に囚われている間に彼の妻は全く馬鹿げた人違いがもとで銃殺された。妻を亡くしたことは御伽話の世界で語られるような純愛を信じているDにとっては生きる希望を無くしたことになる。そしてDも死ぬことを願っていたのであるが，皮肉なことに六ヶ月にも及ぶ牢獄での過酷な日々も，度重なる爆撃も彼の住む家を木っ端微塵に吹き飛ばすことはできてもDを葬り去ることはできなかった。突如として彼を襲ったこれらの不幸は，人間が不慮の出来事，或いは神の怒りとして諦められる自然災害や天災ではなく，その原因がはっきりと断定できる人間の我欲に凝り固まった権力闘争に源を発するものであった。このような人間を苦しめる「暴力はグリーンが人間の本性にそして現実世界に見る悪の形態なのである」[3]。過去の学研的な生活の中では彼が気づかなかったような不幸や不条理なことが実は現実の世界に満ち溢れていることを彼は初めて知らされた。そしてこの二年間に精神的，肉体的に彼に加えられた数々の暴力は彼の心の中から恐怖心と暴力の犠牲となる弱い者に対する憐憫以外の全ての感情を奪い去り，彼を生きた屍のように変えている。これ以後，彼は神の手によって彼を世間から隔離させていた壁を取り払われ，人間の不幸と下劣さの大きさと深さを再確認するように選ばれた者のごとく数々の苦々しい経験をすることになる。ピーター・ウルフは爆撃の後のDの生存を次のように捉えている。

> D's being dug out from under the wreckage of a bombed building near the

> start of his country's civil war stands as a birth — a birth into pain and loss, the core realities of a world darkened by treachery and original sin.[4)]

Dは生きることを強いられているのである。そのような状態のなかで次に彼が認識したことは，不幸や苦しみにうちひしがれているのは彼だけではないという事実である。過去においてDの国を支配し続けてきた旧有産階級の権力奪回の為の容赦のない爆撃によって次々と殺されていく貧しい人々，食料を貰うために行列をしている老人や子供，それは人間の惨めさと不幸を物語る以外の何物でもなかった。Dはそうした人々に憐れみを憶えているが，それは，詰まらない権力闘争に苦しめられ死んで行く人々の姿に自分が見取ってやれず，死なせてしまった哀れな妻の姿を投影しているからである。その結果，自分の世界から放り出されたDに現実の世界でそうした悲惨な状態に置かれ苦しんでいる生身の人間を救うことの方が学問より大切なことであると自覚させたことと，Dの妻のような罪のない無力な人間を情け容赦なく殺戮していく暴力に対する怒りが彼を学問の世界から引き離し，彼に行動を起させた原動力となっている。

> He is not maladjusted but wholly aware and in Greene's terms, this wholeness of life is realised not as a bystander but as an active combatant in war as struggle and in his willingness to face the consequences.[5)]

彼自身は学者であり，むしろ政治体制としてはアリストクラティックな旧体制派の方が彼の研究に対する理解もあり，研究者としての生活も安定するのであろうが，旧体制派は現状からの進歩を目指すものではなく，過去において彼等が築きあげてきた制度，すなわち，少数派の有産階級が多数派の貧しい大衆を支配し搾取する制度を基盤として存在するものである。だから貧困にあえぐ国民の生活を向上させる希望は持てない。彼等こそ国民を搾取し，苦しめている元凶とDは考えているようである。善かれ悪かれ，我々が生きている現代の世界は支配する側と支配される側の両陣営しか存在しない。Dは，人間は生きている限り，搾取する側に付くか，搾取される側に付くかの選択を強いられるのであって，そのどちらでもないという態度は許されないと考えているようだ。一旦，現実の実相を認識したDには，Dの人間的特性である誠実さが個人の問題としてではなく，人間として苦しむ多くの虐げられた貧しい人々に対する同情と憐れみの感情となって，弱い者たちの側に立つことを選ばせたのである。そこには俗世間的な道徳観や倫理観，正や不正，損得では推し量れない，あるいはそれらを超越した人間性そのものに対する信頼感がある。

> All over the world there were people like himself who didn't believe in being corrupted — simply because it made life impossible — as when a man or woman cannot tell the truth about anything. It wasn't so much a question of morality as a question of simply existing. (p. 32)

従って，彼のような人間性に対する誠実さを持たない者には彼のこの誠実さ，或いはそれに根ざす同情と憐憫の情は理解し難いものである。Lは中産階級出身で学識のあるDに「君は我々の側の人間なんだよ」(p. 28)とDをLの側に引き戻そうする。Lは戦争以前に収集していた諸々の美術品，学術書，貴重品を革命の騒乱の中で失ったこととDの妻が戦争の最中に誤って旧体制派に銃殺されたことを同列に置いて，この内戦でDもLも大切なものをなくしたと語るが，過去の遺物である蒐集品の喪失と生身の愛する者の命の喪失を同一視するところにLが如何に過去の世界に重きを置き，現に生きている人間に対する愛情と基本的な倫理観に欠けているかが判る[6]。しかし，Lの過去の貴重な蒐集品に対する真摯な態度にはDが学問や大衆のために注いだ誠実さと同質のものがあることは否定できない。Lの誠実さは認めるとしても，所詮彼は狭量な利己主義者であると同時に過去の世界に生きている人間の代表者なのである。

> D. felt a little envious of him (L) as he stood there in the yard among the cars — he looked established. Five hundred years of inbreeding had produced him, set him against an exact background, made him at home, and at the same time haunted — by the vices of ancestors and the tastes of the past. (pp. 27—8)

そして，彼らの支配する社会が革命前まで貧しい人々を搾取し，貧困に苦しむ大衆の上に彼らの文化と富を築いてきたのだ。従ってLの側がどのような申し出をしようが，D個人の利益のために多くの人間を苦しめてきた古い体制に荷担することは出来ない。DはLの属する旧体制を次のように見ている。

> It was worth killing a civilization to prevent the government of human being falling into the hands of — he supposed they were called the civilised. What sort of a world that be? a world full of preserved objects labelled 'Not to be touched': no religious faith, but a lot of Gregorian chants and picturesque ceremonies. Miraculous images which bled or waggled their heads on certain days would be preserved for their quaintness: superstition was interesting. There would be excellent libraries, but no new books. He preferred the distrust, the barbarity, the betryals . . . even chaos. (p. 30)

Dには過去において大衆を苦しめてきたし，これから先も何の進歩も望めない旧態然とした体制など問題外なのである。それではDは革命政府を全面的に支持しているかといえば，決してそうではない。現革命政府の高官の国民に対する裏切りも充分承知している。Dは一度として革命政府を本文中で讃えることもなければ，Dの国の将来についても希望に満ちた展望を述べることはない。ということは，政治体制はいろいろに変わることはあっても現在と同じような不幸な時代が続くことを暗にほのめかしているようである。「全世界

が暗い影の中に見捨てられているような気がする」(p. 72)というDにはどことなく将来の人間社会に対して救いようのない悲観的な見方をしているところがある。逆に言うならば，Dは *Stamboul Train* の革命家のツィンナーや *The Power and the Glory* の警部(lieutenant)とちがって将来に理想も夢も持っていないので，そのことは苦境に陥っても決してツィンナーほど落担することもないし，警部ほど任務を果たした後も目的を失った虚脱感を味わうこともないということになるかもしれない。Dは，我々の目には勝算のないことは自明の理であるが，人々のためにそうせずにはおれない戦いをただ黙々と戦っている騎士のようなイメージを与える。Dにとって政府の形態など問題ではなく，生きている人間が幸せになればそれでいいのだ。そうなるために自分はそれなりに努力していると自分を納得させているようである。

> he knows he is working for unscrupulous men, supporting an impure cause, and performing evil so that good may win out.[7]

我欲に溺れるものは権力者だけでなく，権力とは関係のない一般の人間も我欲の虜になっている。それが人間の相なのかも知れない。例えば，革命政府からDの行動を監視するように命令されているDの仲間であるKやホテルの女主人が我欲に取り付かれた結果，無力な少女エルスを殺害するという残酷な行為を行った。LやK，ホテルの女主人やベンディッチ卿，フォーヴスやその仲間，革命政府の高官等は我欲の固まりのような存在であり，その我欲を成就するために不正なことも敢えて行ってしまうのである。いうならば，彼等は『ロランの歌』において自己の名誉と虚栄心を満足させるために多くの将兵の生命を顧みることのなく無謀なことを行ったロランと同じなのである。

これに反して，Dが護ってやることを約束していた「エルスの殺害はDが戦っている不正と残忍な暴力の全てを象徴するもの」[8]であると同時に，エルスとの約束を裏切る結果となったことが彼の無力感と憎悪を一層掻き立てる。しかもその相手が妻の時とは違って，はっきりと判明しているだけに彼の背信意識を強烈に増幅し，神を信じぬDに毒は毒をもって制する以外に解決策を見いだせないと判断させた。このことがあって後，Dはあれ程嫌っていた暴力を裁きの手段として肯定する立場に立つ。そしてアトキンズはDのこの変貌について，「Dに残された唯一の人生哲学は義務感だけであった」[9]という。考えてみれば，全ての元凶は人間の本性に潜む我欲のなせる業なのであろう。従って，それは人類が生存している限り，絶えることのない悪徳の繰り返しなのだ。Dにとって人生とはそうした諸々の不正と戦う戦場なのである。DはLに対して「私は自分のために戦っているのではありません」(p. 29)といい，ローズに対しても彼の動機を次のようにいう。

> He said, 'You've got to choose some line of action and live by it. Otherwise nothing matters at all. . . . I've chosen certain people who've had the lean portion for some centuries now. '

'But your people are betrayed all the time.'

'It doesn't matter. You might say it's the only job left for anyone — sticking to a job. It's no good taking a moral line. My people commit atrocities like the others. I suppose if I believed in a god it would be simpler.'

'Do you believe,' she said, 'that *your* leaders are any better than L.'s ?'

. . .

'No. Of course not. But I still prefer the people they lead — even if they lead them all wrong.'

'The poor, right or wrong,' she scoffed.

'It's no worse — is it? — than my country, right or wrong. You choose your side once for all — of course, it may be the wrong side. Only history can tell that.' (p. 67)

「Dは自らを非利己的に処する能力があり，グリーンにとっては，この堕落した世界において真情のこもった自我の発露は英雄的なものとなる。」[10] Dは我欲を離れた存在，つまり，将兵の生命を第一と考えたオリヴィエに共通する冷静な判断力と常識を備えていると見なされる。

従って，狭量なLの目からすれば，Dの行動はDの属する社会の常識を無視した奇異な行動であり，個人の或いは個人の属する特定の階級の利益を求めるLには理解し難いものである。一方，貧しい人々の側に属する政府の高官，大使館の一等書記官，ホテルの女主人，国際語教師Kのような個人の利益や幸福を手に入れるためには，仲間を裏切ることも辞せずとする人々には，これまたDの個人を越えた人間性に対する誠実さは彼等の物差しでは理解できない故にDを疑うことになる。

Dが味方からも敵からも理解されず，信用されず，疑われることは，単に不信の時代に起因するだけでなく，とりもなおさずDの誠実さの深さを証明するものである。Dはその特異性，或いは独善性においてまさにドン・キホーテ的であると同時に，Dを疑うことによって他の者の人間性の卑劣さが強調されてくる。しかしDの特異性はドン・キホーテの滑稽さではない。現実の社会は，グリーンが *A Gun for Sale, It a Battlefield* などにおいて描いているように，暴力と不正に満ち溢れ，救いようのない程堕落しているのである。Dはそうした社会の中にあってそのような世俗的な悪徳に染まっていない，染まらない人間の特異性を持っている。そういう観点からすると，彼は虐げられた状態にある人々を救おうとする理想主義者的な一面を覗かせているように見えるが，彼の行動は，国際語学校のベロール博士や道徳再武装運動員のグローバー女史たちによって代表されるような空想的社会主義者とは現実に対処する姿勢において大きく違う。空想社会主義者は現実の社会の矛盾や不条理そして不正を認識しているが，そうした問題のまっただ中に身を置き，真正面から問題に取り組み，糾弾し解決を計るのではなく，現実から遊離した彼らだけの独りよがりの世界を形成しているに過ぎない。いうならば，彼らは現実遊離主義者である。

これに反して，Dは，生命の危険を賭して大衆を救う実際的な行動に全力を傾けている。彼は不正に満ちた全世界を敵にまわして，妥協，折れ合い，譲歩を一切拒否し，彼が正しいかどうかの二者択一の厳しい道を歩んでいる。正義を貫くために命を捧げるそうしたDの行動や姿を見て，Lは「君は私以上に理想主義者なんだね」(p.29)と，ホテルの女主人は「あんたはセンティメンタルなんだよ。ブルジョアなんだよ。教授なんだよ。そして多分ロマンティックなんだね」(p.83)と，ローズは「あなたはドン・キホーテなのよ。行きなさいよ。撃れて死ねばいいのよ・・・あなたなんて場違いの人間なのよ」(p. 75)という。彼のような人間が存在することが場違いであり，ドン・キホーテ的特異な存在となる社会の状態こそ悲劇的なのである。彼はこの不正と暴力に染まった世の中では異質分子であり，その行く末はローズが「あなたは殺されるのよ，そうじゃなくって？　そんなこと判りきっているんだから」(p. 77)というように悲劇的な結果が予見される。彼は，あらゆる人間の中にある卑近な我欲と虚栄心等，それらが永久に多くの人々に不幸をもたらす元凶となり続けることをロランの性格の中でも現実の社会の中でも充分認識しているにもかかわらず，彼を決して理解することのない，一部の人間の犠牲にされている虐げられた人々のために必死に戦っている醒めたドン・キホーテなのである。

III

裏切り，暴力そして不正の世界は何も戦争をしているDの国だけのことではない。DとLが石炭を買い付けに来た平和な文明国家の英国，Dが「複雑な差別と奇妙なタブーがあるこの国では暴力など場違いであり，暴力は単純すぎて英国人の趣味に反するものだ」(p. 97)と考えている英国においても存在する。例えば，Dの信任状を奪い取るためにレストランの洗面所での殴打未遂，ロンドンに向かう路上での殴打事件，馬小屋での狙撃，ホテルでの女主人とKによる暴力的な詰問，エルスの殺害等がある。直接的な暴力事件は現代社会におけるその普遍性を伺わせるものであるが，より陰湿なものは目に見えぬ暴力である。例えば，ベンディッチ卿の屋敷には歴代国王の妾の肖像画が懸けられ，彼女たちの一族郎党がその資格もないのに，丁度Kが裏切りの代償として大学教授の御墨付きを貰った様に，不当にも貴族に取り立てられている。そうした行為は国王の后の人権侵害であり，貴族たちの権威への侮辱，背信行為以外のなにものでもない。それにまやかしの先祖の肖像画。ベンディッチ卿やフォーブスも国王を真似て彼等の経済力に物を言わせ不道徳にも妾を囲っている。なのにフォーブスはローズに求婚するという破廉恥な行為を平然と行う。Dとの石炭取引きにおいてもDたちの弱みに付け込んだ不当な高値を要求する。更にDの国の旧体制派の反乱軍に石炭を送ることは英国においては違法行為であるにもかかわらず，ベンディッチ卿とその共同経営者たちは破廉恥にもオランダを経由することによって法律の網の目を掻い潜ろうとしている。彼らは彼らの行為によって反乱軍が勢いづき，それによって罪のないどれ程多くの大衆が殺害されるかなど全く考慮していない。ベンディッチ炭

鉱での鉱夫たちの将来に対する何の希望もない惨めな生活，そして仕事にありついたとしても，「連中は機械よりも早く駄目になるんでね」(p. 103)と，人間ではなく消耗品のように扱われる鉱夫たち。荒れはてた炭鉱街。それにひきかえ，ベンディッチ卿の豪華な住い，フォーヴスのリゾートホテルの経営等，資本家と労働者の余りにひどい生活格差は，彼等，労働者が，まさに資本家の目に見えぬ不当な暴力によって痛みつけられていることを証明している。更にエルスのような幼い少女に生きていくために若い男女が出入りするいかがわしいホテルで働くことを強いる社会は，子供の無垢な心を裏切り，堕落させているのみならず，彼らの心からの将来の夢も生きる希望も奪い去っているのである。

> You learned too much in these days before you came of age. His own people knew death before they could walk — they got used to desire early — but this savage knowledge, that ought to come slowly, the gradual fruit of experience. . . . In a happy life the final disillusionment with human nature coincided with death. Nowadays they seemed to have a whole lifetime to get through somehow after it. . . . (p 72)

僅か14歳の子供に「あなたには英国の現実がどんなものか判らないのよ」(p. 79)といわしめる社会は地獄であり，「エルスの無垢とこの世俗的な知識との結合がDを戦慄させる。」[10] まさしく「この地獄はそこなし地獄」(p. 55)なのである。その現実はDの国における爆撃による子供たちの直接的な死よりも子供たちを知らず知らずのうちに徐々に堕落させる点において更に罪深い。

> Fourteen was a dreadfully early age at which to know so much and be so powerless. If this was civilisation — the crowded prosperous streets, the women trooping in for coffee at Buzzard's, the lady-in-waiting at King Edward's court, and the sinking, drowninig child — he preferred barbarity, the bombed streets and the food queues: a child there had nothing worse to look forward to than death. (p. 56)

上は国王から下は庶民に至るまで，罰せられない，あるいは非難されない範囲内において法や道徳を無視し，不正や目に見えぬ暴力をふるって，個人の幸福と経済的利益の追及を優先させているのが文明国家なのである。

そうしたよこしまな人間社会に最も強い不満を覚えている者の一人がローズであるといえる。彼女の祖父はベンディッチ炭鉱の鉱夫であり，母はベンディッチ卿の妾で，ローズは私生児，すなわち望まれぬ子供としてこの世に生を受けた人間なのである。彼女も不幸なことにDと同じように，父親の有産階級にも，母方の労働者階級からも受け入れられない異分子なのである。彼女は，Dの国は違って，長い平和な歴史的背景を持つ文化的な英国に生きているので，搾取や暴力の形態がより巧妙且つ複雑にカモフラージュされている

ため，その本質を見抜けないでいるが，彼女はベンディッチ卿を初めとして，卿の共同経営者である他の人たちの不道徳な生活態度，貧しい人々を脅かし，萎縮させるような豪華な家具，広大な屋敷構え，外観を飾り，形式を重んずる欺瞞的な生活を，他方では，こつこつと身を粉にして働く祖父たち鉱夫の悲惨で，活力も生気も失ったひ弱な人々の希望のない生活を目の当たりにし，社会の矛盾を何となく意識しているようである。

> 'What could they do?' she said. 'You don't know things are here. You've never seen a mining village when all the pits are closed. You've lived in a revolution — you've had too much cheering and shouting and waving of flags.' She said, ' I've been with my father to one of these places. He was making a tour — with royalty. There's no spirit left.' (pp. 170—71)

彼女が税関で声高に係官といい争っているのはベンディッチ卿のような巨大な悪や不正を見逃しながら，取るに足らない些細なことに法を持ち出し，弱い者に対して杓子定規に適用しようとする権力に対し本能的に腹を立てているのである。それは丁度子供がその根拠を指摘できないが，大人の誤魔化しを直感的に感じとり抗議しているのと同じようである。彼女は幼い頃から父親を中心として，人間の欲に取り付かれ，人間性に対する誠実さに欠けた環境の中で育ってきただけに，父親と同年配のDの人間性への真摯な態度は，父親のそれとは異質なものであり，父親の持つ質的なものへの強い嫌悪感と同程度の吸引力を持つ新鮮な魅力となって，また，虐げられた側へのDの誠実な傾斜と孤軍奮闘する姿がドン・キホーテ的魅力となって彼女の心を捕らえて離さない。

> 'Oh God! ' she said, 'don't pretend. Go on being honest. That't why I love you — that and my neuroses, father comlexes, and the rest. (p. 174)

これまで彼女は巨大な不正の力に反抗しながらも，無意識のうちに英国を平和で安全な法治国家であると認めている。何故なら彼女は「世界中で一番治安のいい」(p. 90) ロンドンに向かう途中でのDの危険を匂わす言葉もローズの気を牽く手段としか思わない。そしてDが馬小屋で狙撃された事実を語っても，「信じられない。信じたくないわ。もしそんなことが起これば，人生が全く違ったものになってしまうじゃない？　私たちもう一度初めからやりなおさなくてはならないじゃない」(p. 66) という。しかし彼女は馬小屋で自らDを狙撃した弾丸を発見して，初めて英国も一皮剥げば，Dの国と変わるところのない社会であることを認識させられた。つまり途方もない大きな不正な力がそれに立ち向かうDという孤独で弱い存在の人間を抹殺しようとあらゆる方面から容赦なく襲いかかってくる現実を知り，彼女が戦わなくてはならない相手を確認したようである。この事件以後彼女の言動はもはや以前の彼女とは違って，子供じみたところはなく，大使館においても，エミリー・グローバーのアパートにおいてもDが感嘆するほど臨機応変に対処し，立派な大人

の女性に変身している。エルスの言葉を借りるならば,「あなたを負けさせはしないわ，あなたは紳士なんですもの」(p. 79)ということになるのであろう。彼女がDの身元を証明しようとしたり，逃亡の手助けをしたり，挙句のはて，経済的には何の不自由もないが不誠実なフォーヴスとの結婚を破棄して，近い将来命を落すであろうDと共にDの国へ行くのは，彼女の生きる目的が明確になり，彼女の人生をもう一度一からやり直すために他ならない。彼女もまたロマンティスト，センティメンタルといわれかねない，人の歩まぬ道を歩みだしたもう一人の醒めたドン・キホーテなのである。

Ⅳ

ローズという信頼できる良き理解者である伴侶を得て，Dが戦争によって失っていた人を愛するという基本的な人間の感性の一部を取り戻したことになるが，Dの性的な不能と死を予見させる将来は，グリーンの多くの作品に見られる「幸せになれない夫婦」を暗示するものである。人間が幸せになれたのは人間の誠実さが高く評価されたあのドン・キホーテのいた過去の時代のことであり．誠実さを無くし経済的な利益の追及に走る現代社会と現代人には，Dが度々夢で見るように，それは夢の中でしか叶わぬことなのかも知れない。だからといって，誰もが手をこまねいていたのでは，現代の社会は益々不正がはびこり堕落の一途を辿るだけのことである。誰かがその堕落を食い止める努力をしなくてはならない。*The Confidential Agent* においては，Dがその大役を担っている。

> He had imagined that the suspicion which was the atmosphere of his own life was due to civil war, but he began to believe that it existed everywhere: it was part of human life. People were united only by their vices; there was honour among adulterers and thieves. He had been too absorbed in the old days with his love and with the Berne MS. and the weekly lecture on Romance Languages to notice it. It was as if the whole world lay in the shadow of abandonment. Perhaps it was still propped up by the just men — that was a pity. Better scrap it and begin again with newts. (p.72)

Dは，人間の堕落せざるを得ない相を認識しながらも，必死になってこの世を或は人間の高潔さを支えている数少ないそうした人間の一人なのである。そういうDと同じ資質を備えた人達がローズ，エルスそして元鉱夫のジャーヴィスたちなのであろう。少くとも，彼等のような人達がいる限り，社会が限りなく堕落し続けても，完全に堕落しきることはないという微かな希望が我々に残されている。グリーはDに続く新たなドン・キホーテが現れることを期待しているようである。

Notes

1) Graham Greene, *The Confidential Agent* (London : William Heinemann & The Bodley Head ; 1984), pp. 61—2 以後，本書からの引用は頁数のみを本文中に記す.
2) Graham Smith, *The Achievement of Graham Greene* (New Jersey : Barnes & Noble Books ; 1986), pp. 36—7.
3) J. P. Kulshrestha, *Graham Greene : The Novelist* (New Delhi : Macmillan India Limited, 1977), p. 196.
4) Peter Wolfe, *Graham Greene the Entertainer* (Carbondale and Edwardsville : Southern Illinois University press, 1972), p. 84.
5) Maria Couto, *Graham Greene : On the Frontier* (London : The Macmillan Press LTD., 1988), p. 99.
6) Peter Wolfe, p. 89 ウルフはLの本質を次のように述べている: D. says of L., "His place was among dead things," and he calls him "an antique" and "a museum piece." He is right. The life L. represents is a poor show. A collector, he prizes his paintings, cabinets, and manuscripts above all else and, like all collectors, has no moral instinct — his possessions possess him. He maintains his cool elegance so effortlessly because he has turned his back on human inconsistency.
7) Ibid., p. 83.
8) Richard Kelly, *Graham Greene* (New York : Frederick Ungar Publishing Co., Inc. 1984), p. 125.
9) John Atkins, *Graham Greene* (London : Calder and Boyars, 1966), p. 106.
10) Peter Wolfe, p. 86.
11) Kenneth Allot & Miriam Farris, *The Art of Graham Greene* (New York : Russell & Russell, 1963), p. 143.

On *The Confidential Agent*

—— Two Quixotes ——

Toshihiko UEKI
Faculty of Science,
Okayama University of Science,
1-1 Ridaicho, Okayama 700, Japan
(Received September 30, 1994)

The Confidential Agent has many characteristics, such as 'chase', 'betrayal', 'guilty feeling' and so on in Greene's Entertainment. In addition to these, by using the unknown confidential agents 'D' and 'L', Green avoids to localize their conflicts and alters political, economical and social problems in a certain country of these agents into universal problems of the modern world.

In circumstances of very unsteady political and economical system, it is natural that people should be apt to seek their own interests. People sometimes dare to betray their friends and country to get them. D never betrayed his people and country in spite of being offered the bribe to betray. In this paper we want to analyze the essential sincerity of D's humanity through his struggle to save his people.